後宮の秘薬師3
～滅びの占いと銀の数珠～

硝子町玻璃 Hari Garasumachi





アルファポリス文庫

https://www.alphapolis.co.jp/

序　楊鈴（ヨウリン）と葡萄酒（ワイン）

夕陽が沈むにつれて、空は燃えるような茜色から深い紫色へ移り変わっていく。
夜の帳が下りた後宮を見回るのは、宦官（かんがん）たちの務めだ。二人一組となり、提灯を携えて静まり返った宮中を夜通し巡回するのである。
「……ん？」
「どうした？」
ぴたりと足を止めた相方に、もう一人の宦官が欠伸（あくび）交じりに問いかけた。
「今どこからか、声が聞こえたような……」
「そうか？　俺には何も聞こえなかったが」
ただの空耳か、あるいは風の音だろう。そう思いかけた、その時だった。
「……やさー」
暗闇の向こうから、微かな人の声が風に乗って流れてきた。途端、二人の表情が緊張で引き締まる。

「やっぱり聞こえる。向こうからだ！」
「ああ、行くぞ！」
二人は提灯を大きく揺らしながら、声のする方向へ慌ただしく駆け出した。
そうして辿り着いたのは、とある中級妃の御殿だった。
「よいやさー」
「ほいやさー」
なんとも気の抜けたかけ声が漏れ聞こえてくる。一定のリズムで繰り返されるその声に、宦官たちは訝しげに顔を見合わせた。
「ここって確か、銀流妃（インルー）の宮だったよな？」
「あの変人集団のねぐらか。……何かの儀式でもしてんのかな」
「儀式？」
彼らがひそひそと話し込んでいる間にも、宮の中からは「よいやさー」「ほいやさー」と声が途切れずに響く。
「ほら、少し前に双子侍女の事件があっただろ？　後宮に悪い気が満ちているからって、厄祓いをしてる妃も少なくないらしいぜ」
「銀流妃はそういうタマじゃないだろ。むしろ祓われる側のような……」
「まあ、いいや。さっさと次の場所に行こう」

二人は小さく肩をすくめて、足早にその場を後にする。
結局、銀流妃の宮から響くかけ声は、日付が変わる頃まで延々と続いたのだった。

銀流妃にまつわる異変は、それだけに留まらなかった。
まず、彼女自身がまったく表舞台に姿を現さなくなった。相次いで届く茶会の誘いも、すべて断っているという。
御殿の入口には、同じ顔をした侍女二人が門番のごとく厳しい面持ちで立ちふさがり、もっぱら出歩くのは後輩侍女の楊鈴だけとなっていた。
加えて、いつぞやの晩の奇妙なかけ声。
もしや銀流妃は重い病魔に冒され、病を退けるための祈祷にのめり込んでいるのではないか。
いつしか、そんな不穏な噂が囁かれるようになっていた。
「……というわけで、銀流様のご様子を見に来たのですが、会わせていただけませんか？」
「ダメです」
「お引き取りください」
尚宮長である石榴（シーリュウ）の申し出に対して、紅梅（ホンメイ）と黄桃（ファンタオ）は息ぴったりな動きで首を横に

振った。
「近頃は夜渡りすら拒んでいると、帝も案じておられたぞ。いったいどうしたんだ？」
銀流妃の兄であり武官の蒼波（ソウハ）が、眉をひそめて詰め寄る。
楊鈴の姿を見つけ事情を聞き出そうと近づこうとするが、こちらの気配を察するやいなや逃げられてしまい、なかなか捕まえることができない。
そこで、しびれを切らした二人は直接宮にやってきたのだった。
「一歩も外に出たくないし」
「誰にも会いたくないって」
二人は憂いに満ちた表情で、再び首を横に振る。
「銀流が……引きこもりに……？」
あの騒がしいだけが取り柄の妹に何があったのだろうか。蒼波が一層不安を募らせていると、宮の中から「おえぇっ」と苦悶に満ちた激しいえづき声が聞こえてきた。
「銀流っ⁉」
反射的に宮の中へ駆け込もうとする堅物武官の前に、梅桃（メイタオ）コンビが「ダメっ！」と素早く立ちはだかる。二人の頑なな様子を見て、石榴は溜（た）め息（いき）をつく。
「今日のところは帰りましょう。彼女たちの鉄壁の防御は崩せそうにありません」
そう言って、その場から離れようとした。

「よろしいのですか？」
なおも食い下がろうとする蒼波に、真剣な目をした石榴がそっと耳打ちをする。
「よいですか、蒼波様。今のはおそらくつわりです」
「……っ！」
蒼波の目が驚愕のあまり大きく見開かれる。
「身ごもった女性は感情の起伏が激しくなり、精神状態が不安定になることが多いのです。ここで無理に面会を強いるのは、母体に障りかねません。今は気持ちが落ち着くまで、そっとしておいてあげましょう」
「しかし……」
「楊鈴がついているのです。何も心配はいりません」
石榴の言葉には、確かな信頼が込められていた。
思わぬ形で妹の懐妊を知った蒼波は、複雑な思いを抱きながら歩き出す。
（もしも男児が生まれれば、皇后の座に最も近づくのは銀流となる……）
それは同時に、妹を取り巻く危険が今以上に増すことを意味している。兄として、到底手放しでは喜べない現実がそこに待ち受けているのだ。
それはともかくとして。
この時、蒼波と石榴は気づいていなかった。通りすがりの宮女が自分たちの会話を

耳にし、手にしていた籠を滑り落としたことに。

◇　◇　◇

近頃、楊鈴にはちょっとした悩みがあった。宮中を歩いていると、行く先々で宮女たちに声をかけられるようになったのだ。

「あ、銀流妃のところの」

「おめでとう。これであなたたち侍女も大出世ってわけね」

温かく祝福されることもあれば、敵意と妬みのこもった目で睨まれることもある。

楊鈴はその度に多くを語らず、愛想笑いを浮かべてそそくさとその場を立ち去るしかなかった。

（これは由々しき事態ですよ……）

どういうわけか、後宮中に「銀流妃、御懐妊」の噂が駆け巡っているらしい。

現に、四夫人である愛華妃からは、栄養価が高く妊婦にうってつけとされる燕の巣が贈られてきた。ちなみに今も、顔馴染みの医官からお祝いにと、棗入りの月餅を大量にもらった帰りである。

（そのうち、帝のお耳にも入るだろうな）

いい加減、周囲の相手をするのも疲れてきた楊鈴は、息抜きがてらかつての古巣へ足を向けることにした。

後宮の洗濯場こと、尚服局。

そこでは本日も、宮女や宦官たちがせっせと立ち働いている。

「あ、楊鈴じゃない」

ぱたぱたと楊鈴に駆け寄ってきたのは、肩の上で切り揃えられた、やや色素の薄い髪が印象的な宮女の芽芽だった。

かつて楊鈴が、前髪を目元まで伸ばして周囲から不気味がられていた頃から、変わらず親しくしてくれている大切な友人だ。

「近くを通りかかったものですから。一緒に月餅でも食べませんか？」

「食べる食べる！」

芽芽は差し出された月餅を嬉しそうに受け取ると、ふと思い出したように尋ねてきた。

「あ、でも銀流様のお世話があるのに、早く戻らなくて大丈夫なの？」

やはりというべきか、どうやら尚服局にまで例の噂は広まっているらしい。

ちょうど誰かに吐き出したいところだった楊鈴は、手元の月餅を見つめながら重い口を開いた。

「もう思い切ってぶっちゃけますが、銀流様は妊娠などしていません」
「そ、そうなの？　本当に？」
小さな声で聞き返しつつ、芽芽が顔を覗き込んでくる。楊鈴は静かに瞼を閉じて、ゆっくりと頷いた。
「え……でも、もう完全に確定した空気になってない？」
「そうなんですよね……私も何がどうしてこうなったのか、さっぱりわからないんです」
そういった匂わせをした覚えは一切ない。病気説ならそのうちほとぼりも冷めると思っていたが、妊娠となると話は大きく変わってくる。
「だけど、おめでたじゃないなら銀流様はどうして引きこもってるの？」
「それは……諸事情としか言えません。ですが、妊娠説は根も葉もない噂です。今朝もごはんをモリモリ召し上がっていました」
「そっか……」
芽芽はそれ以上追及することなく、残りの月餅を口に放り込む。それを咀嚼し終えてから、何でもないことのように新しい話題を振ってきた。
「そういえば、双子侍女の片割れ……珠珠だっけ。あの子が死んだ時、楊鈴も一緒にいたんだよね？　どんな感じだった？」

質問の意図が掴めず、楊鈴はぴたりと動きを止めた。
「どんな感じ、とは？」
「ほら、私たちあの二人と喧嘩したでしょ。だからってわけでもないけど、ちょっと寝覚めが悪いというか……」
言葉を濁しつつ、芽芽が目を伏せる。
宮女の中から下級妃を選ぶことになった際、楊鈴や双子侍女と並んで、候補の一人に選ばれたのが芽芽だった。そして売り言葉に買い言葉で、彼女たちと激しい言い争いを繰り広げたのである。
といっても、楊鈴はただ傍観していただけだが。
「そうですね……」
雲一つない空を仰ぎながら、あの夜のことを振り返る。
『私たちは選ばれた人間！　どちらかが国母になるようにって、言いつけられていたんだから！』
珠珠が最期に遺した、呪いのような言葉。
自ら命を絶った彼女の手首には、銀色に輝く数珠が巻かれていた。
いったい誰が、あの二人をそそのかしたのだろうか。その真相は、今も謎に包まれたままだ。

「いかにもこれから命を絶つ人間のような、独特の雰囲気を醸し出していました」
「それじゃよくわかんないよ……」
芽芽が少し呆れたような視線を向けてくる。
「こんなこと、わからなくてもいいと思いますよ」
どんな相手であれ、人が死ぬ瞬間は見ていて気持ちのいいものではない。楊鈴はそこで話を切り上げて、銀流妃の宮に戻ることにした。
入口の前には、紅梅と黄桃が凛々しい顔つきで仁王立ちしていた。
無理やり押し入ろうとする不届き者を撃退するためか、二人の手には玉杓子（たまじゃくし）が固く握られている。
「楊鈴、おかえり～」
「見張りご苦労様です。医局で月餅をいただいたので、ちょっと休みませんか？」
楊鈴が抱えている大きな包みを見るなり、二人の目がきらりと輝いた。
「紅梅、先に食べてきなよ」
「いいの？」
「ここは私が命に代えても守るから！」
紅梅から借りた玉杓子を左手に持ち、黄桃が胸の前で両腕をクロスさせる。頼もしい黄桃に警備を任せ、楊鈴は紅梅とともに居間へ向かった。

しかし、部屋に入った瞬間に楊鈴の顔が強張る。昼間から飲んだくれているはずの主の姿が、どこにも見当たらないのだ。
「紅梅さん！」
「あいよ！」
二人は深く頷き合うと、迷わず厨房へ向かった。
案の定、薄暗い隅のほうで怪しい人影がうごめいている。向こうも楊鈴たちに気づいたのか、びくりと身を固くした。
「そこまでです、銀流様」
「……ちっ」
鋭く舌打ちをしながら、銀流妃がのろのろと立ち上がる。
彼女が物色していたのは大きな木樽だった。何重にも被せられていた布は剥ぎ取られ、蓋も僅（わず）かに開いている。
「うっ」
その隙間から漂ってきた、すえたような臭いに楊鈴は思わず息を詰まらせた。素早く蓋を閉め、布も元通りにして悪臭を遮断する。
そして軽く咳き込みつつ、銀流妃へ振り返った。
「銀流様、味見は控えてくださいとあれほど……今の段階では、まだとても飲めたも

のではありません」
「こないだも味見してえづいてた！」
紅梅も樽を指差しながら、ぷんぷんと憤慨する。
「だって、星系の話だととっくに出来上がってる頃でしょ？　確認はこまめにしないとダメだし」
二人がかりで詰め寄ったところで、銀流妃はどこ吹く風でまったく反省の色を見せない。
（本当に懲りない方だな）
呆れる楊鈴をよそに、再び密閉された樽の奥からは、しゅわしゅわ……と微かな音が聞こえてくる。
そう、楊鈴たちが作っているのは葡萄酒だった。
四夫人の一人である星系妃から詳しい製法を教わり、大量の葡萄を取り寄せたのだ。
『よいやさー！』
『ほいやさー！』
妙なかけ声とともに、梅桃コンビが裸足で桶の葡萄を踏み潰したのは先日のこと。
現在、樽の中ではその果汁がじっくりと発酵を続けている最中だった。
しかしこの国では、個人での酒造りは厳しく禁じられている。

見つかれば大目玉どころの騒ぎではない。そのため、日中は梅桃コンビが玄関に立ち、銀流妃は四六時中樽に張り付くという、徹底した警戒態勢が敷かれることとなった。
（まさか、密造酒の仕込みに加担することになるとは……）
どうせ反対したところで多数決だ。三対一の「数の暴力」で押し切られるのは目に見えている。そんなわけで、楊鈴は渋々三人に協力していた。
薬師としての知的好奇心がほんの少し刺激されたから、では決してない。
（ところで、紅梅さんさっき銀流様がえづいたとか言ってたな）
その声を偶然耳にした者が、つわりと勘違いしたのかもしれない。いずれにせよ、大事になる前に手を打つべきだろう。
三人は居間に戻り、月餅を囲んで一息つくことにした。濃厚でねっとりとした棗餡が、しっとりとした生地と調和して口の中に広がる。
「そういえばね、最近入ったダメダメ宦官が滅茶苦茶モテてるらしいよー」
早くも二個目に突入した紅梅が、お茶を片手にそんな話題を切り出した。
「ダメダメなのにモテるんですか？」
「毎日のように、下級妃や中級妃の宮に出入りしてるんだって」
日中は門番として玄関に張り付いているはずなのに、いったいどこでそんな話を仕

入れてきたのやら。さすがは情報通である。
「いいなぁ、楽しそうだなぁ。うちも呼んじゃおうよー！」
「はぁ？　何言ってんのよ」
銀流妃がすかさず口を挟んだ。
「部外者を中に入れて、樽が見つかったらどうすんの。今、あの葡萄酒は私たちの命より重いのよ」
「はーい……」
ぐうの音も出ない正論を前に、紅梅はしょんぼりと肩を落とした。
そんな二人のやり取りを見ていた楊鈴が、ふと素朴な疑問を口にする。
「そもそも、その宦官は何故下級妃や中級妃の宮に招かれているのでしょう？」
「わかんないけど、ごはんの時にお呼ばれしてるんだって」
「なるほど……」
原則、宦官が妃の住まいに立ち入ることは禁止されている。しかし、宦官と宮女が深い仲になったところで、子が産まれることはない。
そのため表向きは禁止されていても、軽い気晴らしとして黙認されているのが実情だった。

それから数日後。宮中の通路には、主を半ば引きずるようにして歩く楊鈴の姿があった。
「ねぇ……もう帰んない？　いい加減、膝がしんどいんだけど」
「まだ少ししか歩いてないじゃないですか。せめて半刻は頑張りましょう」
あれほど釘を刺したにもかかわらず、銀流妃が性懲りもなく味見を繰り返したせいで、葡萄酒の量はみるみる激減。
結局、残った分を小さな樽へ移し替える羽目になり、銀流妃は見張り番をクビになったのである。
そして、深刻な運動不足を危惧した楊鈴によって、強制的に連れ回されているのだった。
（まあ、これで懐妊の噂も途絶えてくれたらありがたい）
以前のように銀流妃が元気に外を出歩くだけで、周囲の誤解も自然と解けるはずだ。
贈り物をくれた愛華妃には、銀流妃は密偵の手伝いでしばらく姿を消していたのだと説明しておいた。
『それは大変じゃったのぅ』とすんなり信じてくれたので、そちらはもう問題ないと思いたい。
先ほどばったり会った石榴は、まったく膨らんでいない銀流妃の腹部を見るなり、

「そんな……」と大いに打ちひしがれていたが。
「もう無理、一歩も歩けない。お腹空きすぎて死にそう……」
「銀流様、地べたに座ると服が汚れてしまいますよ」
ついに力尽きて膝を抱えてしまった銀流妃を、楊鈴が背後から脇を抱えて引き起こそうとする。
「おっ？」
その時、銀流妃がすぐ近くにある中級妃の宮へ目を向けた。ちょうど門口から、一人の宦官が出てくるところだったのだ。
見送りに出てきた侍女に対し、その宦官が恭しく丁寧にお辞儀をする。
しかし侍女は素っ気ない様子で宦官に包みを押しつけると、すぐに背を向けて扉を閉めてしまった。
それでも宦官は嫌な顔一つせず、もらった包みを大事そうに抱えて立ち去っていく。
「……ひょっとして、あの方が例の宦官ですかね」
楊鈴はその横顔をまじまじと見つめた。
小ぶりな目鼻立ちに、締まりのない口元。お世辞にも健康的とは言いがたい、少し青白い肌。
まったく記憶に残らないほど印象の薄い顔立ちをしており、とてもモテるとは思えない。

（いや、今の流行りはこういう薄味の顔立ちなのかもしれない……）
どうにか好意的に受け止めようと思考を巡らせていると、銀流妃がすっくと立ち上がった。
「よし、どんな男なのかこの目で見定めてやるわ」
息巻くやいなや、その宦官を追いかけ始める。
「あっ、待ってください！」
先ほど泣き言を言っていたのは何だったのか。その変わり身の早さに呆れつつ、楊鈴も慌てて主の後に続いた。

尾行を始めて四半刻。宦官が辿り着いたのは、後宮の片隅にある粗末な宿舎だった。
どうやら彼は六局にすら就かない、雑用係の身分らしい。外で一息ついていた仲間たちを見つけると、彼は「ただいまー」と親しげに手を振った。
「おー、順子（シュンツ）。今日もお妃様のところか？」
「はい。これ、お礼にもらってきました」
順子と呼ばれたその宦官は、いそいそと懐の包みを広げた。中から一口大の小さな包子（パオズ）がいくつか顔を覗かせ、それを嬉しそうに仲間たちへ配っていく。

「いつも言ってるけどさ。順子がもらったもんなんだから、一人で食っちゃっていいんだぞ？」
「こんなに一人じゃ食いきれないですから。遠慮なくいっちゃってください」
そう言って順子も輪に加わり、全員で包子を頬張り始める。
「ん、花生（ピーナッツ）餡か。久しぶりに食ったなぁ」
「俺のは胡麻（ごま）餡だぞ？」
「へえ、それぞれ中身が違うのかね」
そんなふうに和気あいあいと盛り上がっていると、一人が楽しげに順子の背後へ回り込み、両目を素早く手で覆い隠した。
その意図を察した別の宦官が、自分の包子をほんのひと欠片ちぎって順子の口へ放り込む。
「はい！　何味か当ててみ？」
「んー……こいつは蓮（はす）の実の餡ですね」
ほとんど間を置かずに言い当てた順子の言葉に、一同からワッと歓声が上がった。
「すげぇ、一発で当てやがった！」
「順ちゃんさすが！」
盛り上がる宦官たちの様子を、楊鈴と銀流妃は物陰からそっと観察していた。

「皆さん、とても仲がよさそうですね」
「こういうところにいる奴らは、仲間意識が強いっていうしね」
「それで、銀流様の目から見て順子様に男性としての魅力はありますか？」
「待って、今見つけるから」
そう言って、銀流妃は真剣な顔つきで順子を凝視する。もはや睨みつけているといってもいい。
だが、しばらくして小さく息を吐くと、ゆっくりと口を開いた。
「……恐ろしいくらい、モテ要素がないわね。人間としてはいい奴なんだろうけど、妃たちがわざわざ宮に連れ込むほどの男とは思えないわ。あいつら、全員目が腐ってんじゃないの？」
「順子様にもお妃様たちにも失礼ですよ」
とはいえ、楊鈴も銀流妃の見立てを否定することはできなかった。
（実際、見栄えのいい宦官ならほかにいくらでもいるもんね……）
神経を研ぎ澄ませて順子の光るものを見出そうとしていると、ふいに背後から声をかけられた。
「あなた方も、順子にご用ですか？」
振り返ると、いつの間にか別の宦官がすぐ後ろに立っている。楊鈴と銀流妃は示し

合わせたように澄ました顔を作った。
「いえ、ちょっと迷い込んでしまっただけです」
「邪魔したわね」
そう言い残して、何事もなかったかのようにその場を足早に立ち去る。
いったい、彼のどこに妃たちを惹きつける魅力があるのか——そんな大きな謎を胸に残したまま。

順子のことなどすっかり忘れた半月後。楊鈴と梅桃コンビ、そして銀流妃の四人は厨房に集まっていた。
三人が息を呑んで見守る中、楊鈴が恐る恐る樽の蓋を開ける。
その瞬間、厨房いっぱいに広がったのは、果実の風味をたっぷり含んだ芳醇な香りだった。
「完成ですね。……多分」
「すごくいい匂いする！」
「早く飲みたい、待ちきれない！」
梅桃コンビが互いの手を取り合って、喜びの舞を踊り出す。
「よし、これに移し替えるわよ」

銀流妃が楊鈴に差し出したのは、暗緑色の細長い酒瓶だった。象牙色の張り紙には、流れるような異国の文字が書かれている。
以前、星系妃から贈られた葡萄酒の瓶を、捨てずに取っておいたのだ。
「ちょっと待っててください。えーと……あったあった」
楊鈴は木の棚から陶器の漏斗を取り出すと、それを酒瓶の口に嵌め込んだ。そこに玉杓子で樽から掬い上げた葡萄酒を、手際よく注ぎ込んでいく。
コポコポと小気味よい音を響かせながら、瓶は少しずつ、深い赤紫色の液体で満たされていった。
「何かそれっぽいねー」
紅梅が物珍しそうに瓶を凝視する。
「楊鈴、栓はどうするの？」
「元のは傷んで使えないので、これで代用します」
黄桃が問いかけると、楊鈴は細く削った木片に麻布を巻き付け、仕上げに蜜蝋を塗った手製の栓を見せた。
「少し引き抜きにくいですし、長期保存には向かないので、その都度新しく作り直す必要がありますが……」
「一日で飲み切るから問題ないでしょ」

銀流妃から豪快な宣言が飛び出す。主の言葉に、梅桃コンビも「さんせーい！」と嬉しそうに声を揃えた。

（せっかく苦労して仕込んだのに……）

楊鈴は心の中で苦笑する。

だが、衛生面を考えれば、むしろそのほうが正しいのかもしれない。現に紅梅と黄桃の二人は、以前に傷んだ葡萄酒でひどい食中毒を起こした前例がある。

「あ、そういえばつまみを用意してなかったわね」

「大根の豆醤（みそ）漬けなら、すぐに出せますよ」

「それって葡萄酒と合うの？」

楊鈴の申し出に、銀流妃が微妙な表情を浮かべる。はしゃいでいた梅桃コンビも、ぴたりと黙り込んでしまった。

（普段だったら、とりあえず豆醤漬けを出しておけば機嫌がよくなるのに）

酒と肴にも相性というものがあるのだと、楊鈴はさして必要のない知識を学んだ。

そして全員で居間に戻ろうとしたその時、楊鈴はふと足を止めた。何か、とてつもなく大事なことを忘れている気がしてならない。

「銀流様……今日って、何か予定はありませんでしたっけ？」

「今日？　そういえば緋蘭（フェイラン）の茶会に誘われて……茶会っ!?」

自らの発言に、銀流妃がはっとしたように目を見開く。楊鈴でさえ、抱えていた酒瓶を危うく落とすところだった。

（葡萄酒のことで頭がいっぱいだったとはいえ、まさか私まで……！）

この三人のぐうたら癖が確実に伝染している。背中に冷たい汗が伝う中、梅桃コンビが悲鳴を上げた。

「緋蘭様に怒られるー！」

「またパシられるー！」

だが、ここで慌てふためいても始まらない。楊鈴は葡萄酒を梅桃コンビに手渡すと、銀流妃の腕をむんずと掴んだ。

「事は一刻を争います。私と銀流様は先に行ってますので、お二人はどこかに瓶を置いてから来てください！　くれぐれも人目につかない場所にお願いします！」

「「了解！」」

宴会を開くのは帰ってからだ。楊鈴は「腕がもげる！」という主の悲鳴を無視して、緋蘭妃の宮へ急いで向かった。

「よいですか、銀流。誰にでも失敗や間違いはあるものです。やむを得ない事情もあるでしょうし、遅刻そのものを頭ごなしに咎めるつもりはありません。……私とて、

そんな不毛な真似をしたくはないのです」
「よかったぁ、じゃあ今回はお咎めなしってわけね」
「どうしてそうなるのですか！　あなたはあまりに遅刻が多いです！　その度に叱るこちらの身がもたないと言っているのですよ！」
悪びれもせず開き直る銀流妃に、鋭い怒声が容赦なく浴びせられる。
「やむを得ない事情というのは不慮の事態を指すのであって、あなたのそれはただの怠慢です！　楊鈴が来てから少しは改善されたと思ったのに、まったく成長していないではありませんか！」
「はいはい」
「はい、は一回でよろしい！」
ほかの妃たちが静かに見守る中、銀流妃は緋蘭妃の正面に座らされ、延々とお説教を受けていた。
（まるで不良娘と手を焼いているお母さんだ）
おそらく、この場にいる誰もが同じことを考えているに違いない。楊鈴は壁際に立ちながら、公開処刑される主をじっと見つめていた。
「これからは気をつけるように。次に遅れてきたら、お菓子は抜きですからね」
緋蘭妃はそう言って説教を締めくくった。

そこへ、配膳の手伝いを命じられた梅桃コンビが「お待たせしましたー」と声を揃えて、菓子と小皿を運んでくる。
張りつめていた空気は一瞬で霧散し、ようやく和やかに茶会が始まった。
茶会の最中、侍女たちは毒見の時を除けば、基本的に壁際に控えているだけである。手持ち無沙汰になるため、やがて侍女同士でひそひそ話が始まるのも黙認されていた。
（おや、あの方は……）
見覚えのある顔を見つけ、楊鈴は壁際に沿うようにして静かに歩み寄った。いつぞや、例のダメダメ宦官に冷たい態度を取っていた侍女である。
「差し支えなければ伺いたいのですが……そちらの宮では、順子という方を招いたことはありますか？」
「え？」
試しにカマをかけてみると、侍女はふいを突かれたように目を丸くした。
「突然お声をかけてしまって、申し訳ありません。近頃、めっぽうモテる宦官がいると耳にしたものですから」
「招くというか……その、ねぇ？」
侍女は口ごもりながら、隣にいた同僚の袖を軽く引いた。話題を振られた同僚も、言い淀むように視線を泳がせる。

「まあ、確かにモテる、と言ったら嘘にはならないけど……」
「彼の魅力はいったいどこにあるのでしょうか？　善人であるのは確かですが、どうしても異性として惹かれる要素が見つからなくて」
「そ、そこまで言わなくても……」
楊鈴の容赦ない辛口評価を聞いて、侍女たちは引き気味に苦笑する。するとそこへ、別の宮の侍女が物知り顔で会話に割り込んできた。
「魅力といえば……やっぱり、あの絶妙な舌使いよね」
その意味深な呟きに、先ほどの二人も「わかるわかる」と深く頷き合う。
「でも、この話はここまでね。こんな場所で大っぴらに話すことじゃないから」
最初に楊鈴が話しかけた侍女が、はっとしたように周囲を見回しながら声を潜めた。
（人は見かけによらないものですね）
うっかり下世話な話題に踏み込んでしまったと察した楊鈴も、それ以上の詮索はやめることにした。

それから一刻半後。お説教から始まった茶会も無事に終わり、楊鈴たちは弾んだ足取りで自分たちの宮へ帰ってきた。
「銀流様、すごい怒られちゃったね」

「でもお土産もらえたし、まあいっか」
紅梅と黄桃が顔を見合わせてにっこりと笑う。今日の茶会で出された菓子は、葡萄酒によく合いそうな果実の蜜漬けだったのだ。
「つまみも手に入ったことだし、早速飲むとするわよ！」
銀流妃が意気揚々と居間の扉を開け放ち、その脇から梅桃コンビがささっと室内に入り込む。
しかし次の瞬間、二人は「あれ？」と揃って首を傾げた。
「ここに置いたはずなのに……」
「そんなバカな……」
ぶつぶつと呟きながら棚の隙間を覗き込んで調べていく。やがて完全に動きを止め、引きつった表情で銀流妃を振り返る。
「葡萄酒ありません」
「なくなっちゃいました」
「あぁん⁉」
ドスの利いた声を上げた主に、梅桃コンビは「ひぇっ」と小さく身を震わせる。
「お二人とも、どこにやったんですか？」
「「責められても困るー！」」

まったく記憶に残っていないのか、二人は今にも泣き出しそうな顔でぶんぶんと首を横に振る。

「手足を生やしていなくなっちゃったのかな……」

「バカなこと言ってないで、さっさと探すわよ」

黄桃の頭をぱしんと叩いて、銀流妃が棚を漁り始める。侍女三人も居間をくまなく探してみるが、やはり葡萄酒の瓶はどこにも見当たらない。

「あんたたち、置いたのは確かにこの辺？」

「多分……」

いつもより一段低い声で問いかけられ、紅梅が自信なさげに答える。もしその言葉が真実ならば、残る可能性は一つしか考えられない。

「盗まれたのかもしれませんね」

「でも、戸締まりはしっかりしていったよ！」

「ほかには何もなくなってないし！」

楊鈴の推測に、梅桃コンビがすぐさま異を唱えたその時だった。

ドンドンドンッ‼

突然、居間にまで響き渡るほど力強く玄関の扉を叩く音がした。

「銀流様っ‼　楊鈴っ‼」

続けざまに外から聞こえてきたのは、石榴のひどく緊迫した声だった。ただならぬ気配に、四人の顔から一斉に血の気が引いていく。

（まさか、すでに葡萄酒の件が……⁉）

最悪の想像が頭をよぎり、心臓が嫌な音を立てて跳ねる。

しかし、このまま居留守を決め込むわけにもいかない。

意を決して玄関へ歩み寄ると、楊鈴は扉を少しだけ開けて「何事ですか」と尋ねた。銀流妃と梅桃コンビも、楊鈴の頭の下から縦一列に並んだ顔を覗かせる。

「よかった……皆さん、ご無事でしたか」

一同の顔を見て、石榴はほっと胸を撫で下ろした。

「……何かあったのですか？」

楊鈴が重ねて問いかける。

「とある中級妃が、先ほど毒入りの酒を飲んで倒れてしまったのです」

石榴の言葉を聞いて、銀流妃は怪訝そうに眉をひそめた。

「それと、うちが何の関係があるの？」

「その酒は葡萄酒とのことですが、確か銀流様のお部屋にもあったのではないかと思いまして……」

楊鈴たちの呼吸が、一瞬止まった。

そんな四人の動揺に気づく様子もなく、石榴は憂いを帯びた顔で話を続ける。
「そちらの酒にも毒が入っているかもしれないので、念のために中身を確認させ……」
言い終えるより先に、楊鈴は「失礼します」と言って扉を大きく開け放った。
「私、倒れた妃が心配ですので医局へ向かいます」
「え、ええ。行ってらっしゃい……？」
「もしかしたら仲のいい妃かもしれないし、私もついていくわ！」
銀流妃も勇ましい面持ちで宮から出てくる。その背後で、紅梅と黄桃が扉をピシャリと閉め、素早く重々しい錠前を下ろした。
「それでは石榴様、行ってまいります」
「あの、確認……ちょっと皆さんっ⁉」
呆気にとられる石榴をその場に残し、四人は振り返ることもなく駆け出した。
消えた葡萄酒、そして時を同じくして起きた毒殺未遂。
（どうか無関係でありますように……！）
もつれそうになる足を必死に動かし、楊鈴たちはなだれ込むようにして医局へ飛び込んだ。
「みんな、いらっしゃい。銀流様も一緒なんて珍しいね」
息を切らして突入してきた四人を、顔馴染みの医官がのんびりと出迎える。

「お、おじ、さん……っ、はぁ、はぁ……ど、毒……酒に……っ！」
「事件のこと聞いてきたの？　毒はよくあるありふれたやつで、毒性もあんまり強くなくてね。吐き気と下痢程度で済んだよ。数日も休めばよくなるんじゃないかな」
にこやかに語る医官だが、楊鈴たちが知りたいのは被害に遭った妃の安否などではない。
「で……その、毒入りの酒は、ここにあるの？」
「え？　まあ、一応保管してありますけど……」
並々ならぬ気迫を放つ銀流妃に圧され、医官が「ちょっと待ってて」と奥へ入っていく。
やがて戻ってきた彼の手には、一本の酒瓶が握られていた。
「はいこれ。銀流様、飲んじゃダメですからね」
わりと本気で釘を刺しながら、医官がそれを軽く掲げる。
暗緑色の硝子で作られた、細長い形状のボトル。その中央には、見覚えのある異国語のラベルが貼られている。
紛れもなく楊鈴が手際よく密造酒を注ぎ入れた、あのボトルだった。
「「あっ、うちの……」」
反射的に梅桃コンビが指差した瞬間、

楊鈴と銀流妃は真顔で二人の口を塞いだ。
「用も済みましたから、私たちはこれで失礼します」
引きつった笑みでそれだけ告げると、四人は大急ぎで自分たちの宮へ引き返していく。
「あの子たち、何の確認に来たのかな？」
医官はのんきに首を傾げ、何事もなかったかのように自分の仕事を再開したのだった。

「やっぱり、誰かに盗まれてたんだ！　それで、私たちのお酒に毒を入れてから妃に飲ませたんだよ！」
「でも、どうやって中に入ったんだろう？　しっかり鍵をかけて出かけたはずなのに……」
宮に戻った紅梅と黄桃は、隠しきれない不安に駆られ、おたおたと居間を動き回っていた。そんな二人をよそに、銀流妃は現実逃避を決め込んで黙々と酒杯を傾けている。
「侵入方法はまだわかりませんが、盗んだ犯人ならある程度絞れてきました」
絶望と混乱が渦巻く空気の中、顎に手を当てた楊鈴が厳かに口を開いた。

「ほんと⁉」
「紅梅さんの言う通り、妃に悪意を持つ何者かが葡萄酒に毒を混入した可能性も考えられます。ですが私はその妃の侍女、あるいは彼女に取り入ろうとする者が『善意』で贈ったものと見ています」
「どゆこと？」
「医局でおじさんが席を外している隙に、机の上の診断書を盗み見たのですが……お二人とも、このお名前に覚えはありませんか？」
楊鈴がある妃の名を告げると、梅桃コンビは弾かれたように顔を見合わせた。
「「銀流様に勝るとも劣らない、あの酒カス妃！」」
「はい。しかも、彼女が最も好んでいるのは葡萄酒です」
以前、星系妃が葡萄酒を配ったことがある。
異人の血を引く星系妃の父親は手広く貿易を営む豪商で、『いい銘柄を取り寄せた。これで友人を増やすように』という手紙が同封された、大量の葡萄酒が送られてきたのがきっかけらしい。
娘が後宮で孤立していると聞き、気を揉んだ父親なりの精一杯の親心だったのだろう。そんなこんなで、星系妃からのお裾分けを受け取った一人が、今回毒に倒れた妃だった。

異国の味にすっかり魅了された彼女は、自分でも同じものを取り寄せようとしたが、すでに製造を終了していたのだという。

そして今回、楊鈴たちが手作り葡萄酒を入れたボトルが、まさにそれと同じ銘柄だったのである。

「それで、星系様に『もっと欲しい』ってしつこく頼んで、怒らせちゃったんだよね」

「出禁を食らった後も、めげずに手紙を送り続けてたんだっけ？」

とにかく葡萄酒への執念がすさまじく、彼女はしばらくの間、星系妃に粘着していたのである。

「星系様は少々自分本位なところがありますから、こう言って追い払ったのかもしれません。『ほかの妃から分けてもらえ』と」

「あり得るかも……」

「星系様だもんね……」

星系妃の数少ない飲み友達である銀流妃なら、同じ酒をたくさん持っているかもしれない。そう踏んだ妃が侍女に命じたのか、はたまた侍女が独断で動いたのか。

いずれにせよ、犯人は何らかの方法でこの宮に忍び込み、葡萄酒を見つけて持ち去った——それが楊鈴の導き出した推理だった。

しかし、ふと黄桃が「あれ？」と首を傾げ、一つの疑問を口にする。

「それなら、どうして毒なんか入ってたんだろう？」

「……ここからが、最も重要な話です」

楊鈴は一段と表情を引き締め、声を潜めた。

「落ち着いて聞いてください。私たちは知らず知らずのうちに、自らの手で『毒入りの葡萄酒』を作ってしまったのかもしれないのです」

「「毒っ!?」」

話の展開が思わぬ方向へ転がり始め、梅桃コンビの素っ頓狂な声が居間に響き渡った。

「で、でも、葡萄以外は何も入れてないよ!?」

「ただ発酵させていただけなのに!?」

「何故このような事態になったのか、確かな理由はわかりません。ですが『毒』というのは未知のものです。発酵の過程で何らかの異常な現象が起き、変化してしまった可能性もあります」

そう語りながら楊鈴は窓辺に歩み寄り、燃えるような夕暮れの空を見上げた。

「最後の一週間は試飲を禁止していましたから、その間に毒素が発生したのでしょう。もしこの事実が発覚すれば、私たちは密造酒だけでなく、毒物製造の罪にも問われる

ことになります。……縛り首は確実ですね」
「まだ美味しいものをいっぱい食べてないのにぃーっ！」
「お嫁にも行ってないのにぃ！」
紅梅と黄桃は互いの手を握り締め、悲痛な叫びを上げる。
すると、それまで無言で杯を傾けていた銀流妃が、思い出したように事実を打ち明けた。
「私、四日前の夜中にこっそり飲んだけど、この通りピンピンしてるわよ」
「銀流様、我慢できなさすぎ」
「ほんと油断も隙もないよねー」
侍女二人の冷ややかな視線を意に介さず、銀流妃はじろりと楊鈴へ視線を向けた。
「やっぱり、誰かが盗んだ後に毒をぶち込んだだけじゃないの？」
「それは……まあ、そうかもしれませんが……」
もごもごと口ごもる楊鈴に、銀流妃はさらに容赦なく切り込んでいく。
「ていうか、あんたが『何らかの現象』だの『そうなったのかも』だの、そんな曖昧な言い方で自分たちが毒を作ったって断言するのも、なんか変じゃない？」
「……」
重苦しい沈黙が室内に満ちていく。

紅梅と黄桃はしばし顔を見合わせた後、ゆっくりと楊鈴のほうへ視線を移した。
「「……楊鈴、何か隠してる？」」
「目ぇ血走ってるわよ」
三人の疑いの眼差しが、約一名へ突き刺さる。
やがて、先ほどまで饒舌に推理を披露していた名探偵は、がくりとその場に膝をついた。
そして苦渋に満ちた表情で自らの所業を語り始める。
「じ、実は……三日前の夜中に、樽の中に殺菌作用のある薬草を手当たり次第入れてしまいました……っ！」
「マジで何してんの、あんた⁉」
恐ろしい事実が明らかとなり、銀流妃は酒杯を握り締めながらガタンッと立ち上がった。
「仕込みを始めた頃から、こんな適当な作り方で本当に大丈夫なのかなって不安だったんです。しっかり洗ったとはいえ、素足で葡萄を潰してましたし……」
絞り出すような声で言って、楊鈴は力なく項垂れる。
「ずっと一人で抱えてたんだね」
「相談してくれたらよかったのに」

楊鈴は下戸なので、葡萄酒を飲むことはない。ただ銀流妃たちの身を案じての暴挙なだけに、梅桃コンビは呆れつつも楊鈴を怒るに怒れなかった。

「……どういう理由であれ、毒を作ったことに変わりはないわ。そのうち石榴が酒瓶の中身を確認しにくるけど、肝心の酒瓶がないのはかなりまずいわよ」

「捨てちゃったって言うのは？」

紅梅の提案に、銀流妃は眉間に皺を寄せた。

「もし犯人が捕まって、ここから盗んだってゲロったら、私たちの嘘までバレるでしょうが。虚偽罪も上乗せされて、さらにエグい殺され方をすることになるけど、それでもいいの？」

ぶんぶんとかぶりを振る梅桃コンビを見て、銀流妃は再び席につくと、諦めたように杯へ酒を注いだ。

「まあ……今さら悔いても仕方ないわ。ほら、楊鈴もさっさと立って、これからのことを考えなさいよ」

「これからのこととおっしゃいますと……？」

楊鈴がのろのろと顔を上げる。

「残り短い人生をどう過ごすかに決まってんでしょ」

死罪を覚悟した、重みのある言葉だった。

天井を仰ぐ銀流妃の横顔には、すでに現世への未練を断ち切った僧侶のような清々しさすら漂っている。

（まず尚服局のみんなに遺書を書かないと……それから、医局のおじさんたちには役に立ちそうな薬の調合を書き残しておこう）

唐突に訪れた終活を前にして、楊鈴も冷静に考えを巡らせ始める。

「やっぱり……楽しんだもの勝ちじゃん？」

「だよね」

一方、梅桃コンビは思いついたように深く頷き合った。

「どうせおしまいなら、死ぬ前に例のダメダメ宦官を呼んじゃえ！」

「えー、あいつ呼ぶの？」

銀流妃がつまらなそうに唇を尖らせる。以前、順子のあまりの魅力のなさを目の当たりにしたせいか、いまいち気乗りしない様子である。

しかし、それで引き下がる二人ではない。

「一度でもいいから男とイチャつきたい！」

「最期の思い出作り！」

二人が鼻息を荒くして主に詰め寄っていく。

そのあまりの雄々しさに圧倒されつつ、楊鈴はふと思いたったように尋ねる。

「お二人とも、蒼波様ではダメなのですか？　なかなかの優良物件だと思いますが」
　結婚願望は一応あるらしい同僚たちが、何故これほど蒼波に興味を持とうとしないのか、以前から不思議でならなかったのだ。
「兄者は兄者以外の何物でもないし」
「楊鈴が呼びたいなら呼んでもいいよ」
　投げやりな口調で勧められて、楊鈴は即座に首を横に振った。
「あのお方は心が硝子（ガラス）のように繊細ですから、私たちと今生の別れだと知ったら咽（むせ）び泣いてしまいますよ。いっそ顔を合わせず死に別れたほうが傷は浅くて済みますし、可能なら死体もすぐ焼却してもらいましょう」
「気遣いの方向性がおかしい！」
「そっちのほうが兄者可哀想だよ！」
　真剣に考えたつもりが、何故か全力で引かれてしまう。何がいけなかったのか首を傾げつつも、楊鈴は早速例のオンボロ宿舎へ向かった。
　日が暮れ、薄闇が辺りを包み込み始める宵の口。宿舎の戸を数回叩くと、少し間を置いてから順子が出てきた。
「こんばんはー。何か追加の仕事ですか？」
　ぺこりと頭を下げながら尋ねてくる彼に、ちょうどよかったと楊鈴は用件を告げた。

　すると、順子は申し訳なさそうに眉を下げた。
「すみません……今夜はもう予約済みなんです。明日の昼間だったら、空いているんですけど」
　どうやら、彼の妙な人気は相変わらずのようである。
「わかりました。では、その時間帯でよろしくお願いします」
「あ、はい。じゃあ、明日伺いますので」
　順子は恐縮したように、再び頭を下げた。
（これほどちやほやされているというのに、少しの驕（おご）りも見せない）
　楊鈴は「楽しみにお待ちしております」と一礼して、その場を後にした。
「あの、すみませんっ！」
　背後からかけられた声に足を止めると、順子の同僚らしき宦官が息を切らせて走ってきた。
「あいつ、明日そちらに伺うんですよね？」
「順子様のことでしょうか？」
　楊鈴の問いに、宦官は思いつめたような表情で頷く。
「……順子にあまり無茶なことをさせないでください」
「はい？」

「あいつって……本当にドジで、バカな奴なんですよ。今日だって薪割りで、うっかり自分の足に斧を振り下ろしそうになってたし……でも、それでも、俺たちの大事な仲間なんです！　こんなハードスケジュール、あいつの体が……もちません……っ！　ですから……どうか、お願いします……っ！」

懇願する宦官の声は微かに震えていた。そのまま勢いよく頭を下げると、彼は楊鈴の返事を待つこともなく、サッと背を向けて宿舎の中へ戻っていった。

（私、そんなにケダモノに見えたの？）

なんとも心外な誤解をされ、楊鈴は釈然としない。

モヤモヤとした気分のまま宮に戻ると、居間では梅桃コンビが熱心に掃除に励んでいた。

珍しく自ら卓上を拭いていた銀流妃が、手を動かしながら石榴の来訪を教えてくれた。

「明日の午後、後宮内で酒瓶の一斉点検が行われるみたいよ。葡萄酒はすべて提出するようにですって」

あまりに急な話だが、これ以上の被害を出さないための迅速な処置なのだろう。頭では理解していても、楊鈴は「余計なことを」と思わずにはいられなかった。

◇　◇　◇

翌日の昼時。居間の卓上には、見事なまでに豪勢な料理がずらりと並べられていた。さらに、銀流妃が秘蔵していた銘酒まで何本も添えられている。

最後の晩餐としては申し分のない、いや、むしろ贅沢すぎるほどの光景だった。

「見て見て、楊鈴！」

「いつもより気合入れちゃった！」

梅桃コンビは、これでもかと顔を真っ白に塗りたくり、唇には真っ赤な紅を引いた厚化粧で待機していた。頭には銀流妃から借り受けた簪（かんざし）が何本も突き刺さっており、二人が動く度にチャラチャラと騒がしい音を立てている。

（化け物かと思った）

楊鈴はとりあえず「印象に残るお姿ですね」と無難な言葉を返して居間を後にした。そして客人を迎えるために宮の入口へ向かい、静かに佇んで待つ。

やがて約束の時間になると、遠くから一人の男が歩いてくるのが見えた。

「あ、お待たせしてしまってすみません」

楊鈴に気づくなり、順子が小走りで駆け寄ってくる。

「いえ、時間ぴったりですのでお気になさらず。さあ、中へどうぞ」

深々とお辞儀をして、楊鈴は順子を居間に案内した。扉の前に立ってコンコンと叩く。

「皆さん、順子様がお見えになりました」

そう告げて扉を開くと、三人が一斉にこちらを振り返る。

順子が「わぁ……」と、厚化粧の二人を見て小さく悲鳴を漏らしたのを、楊鈴は聞き逃さなかった。

一方の梅桃コンビは、順子を見つめたまま動きを止めている。

（思っていたのと違う、って顔をしてるな）

絶世の美男子を想像していたのだろう。二人が反応に困っているとも知らず、順子は卓上の料理の数々に目を向けた。

「じゃあ、端からいかせていただきます」

早速箸を手にする順子に、銀流妃は「は？」と間の抜けた声を上げた。

「あんた、来て早々乾杯もしないで一人で食べ始める気？　いくらなんでも、わんぱくがすぎるでしょ」

「え、でもいつもそうですけど……」

何やら話が噛み合わない。

紅梅は戸惑いの表情で楊鈴を振り返った。

「楊鈴、なんて言って誘ったの？」

「いえ、普通にお食事でもいかがですか、って……」

以前見かけた時は気前よく仲間たちに包子を配っていたので、まさかこんな礼儀知らずの宦官だとは夢にも思わなかったのだ。

「あのね、これはみんなで食べるんだよ」

「はぁ……」

黄桃が説明しても、順子はいまいち理解していない様子で首を傾げている。この時点で、楊鈴は彼を招待したことを激しく後悔し始めていた。

「ああもう、いいから食べましょうよ。ちんたらしてたら午後になっちゃうわ」

銀流妃に促され、楊鈴と梅桃コンビは手際よく各自の前に小皿を並べ、酒をそれぞれの杯へ注いで回った。ちなみに、楊鈴の杯の中身は茶である。

一同が卓を囲んだところで、銀流妃はすっと自らの杯を掲げた。

「我ら、主従の契りを結びし者たちなり。生まれた日は違えど、死ぬ時は同じ年、同じ月、同じ日であることを――」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

順子の焦ったような声が、銀流妃の不穏な口上を遮った。

「決起集会みたいな空気を出してますけど、これっていったい何の集まりなんです

か？」

異様な雰囲気に本気で怯え始めた順子を見て、楊鈴と銀流妃は静かに目配せを交わした。

「……私たちがこうして人と接するのも、おそらくあなたが最後になるでしょう。あなたにだけは、すべてをお話しします」

そう前置きをして、楊鈴はこの宴を開くことになった経緯をかいつまんで語った。すると、順子の表情はみるみるうちに呆れを通り越して、哀れみの色へ変わっていく。

「勝手にお酒なんて造るから、そんなことになるんですよ……」

「まったくもってその通り」

「何も言い返せない」

梅桃コンビが酒を呷りながら、いかにも他人事のように頷く。

「俺……これから処刑される人たちと一緒に食事をするんですか」

「まあ、私たちのことはあんまり気にしなくていいわよ」

「そんなこと言われても……あ、でも、今日の毒見はどうするんですか？　てっきり俺、それで呼ばれたのかと」

その問いかけに、楊鈴たちは「え？」と声を揃えた。

「今日……というのは？　まさか、普段からされているのですか？」

「は、はい。俺、持ち場の仕事はからきしダメで失敗ばかりなんですけど、舌だけは昔から異常なくらい敏感なんですよ」

順子は照れくさそうに頭を掻きながら、過去の出来事を語り出した。

「以前、食事の汁物をほんの少し舐めたら、違和感があって、みんなに『食べちゃダメだ』って止めたことがあったんです。そしたら後から、毒草が入ってたことがわかって。いつの間にか材料の中に紛れてたらしいんです」

自分の取るに足らないような体質のおかげで、図らずも仲間たちの命を救うことができた。ほんの小さな武勇伝を順子は誇らしく思っていたが、話はそこで終わらなかった。

「そうしたら、その噂がほかの宮にまで広まったみたいで、侍女さんたちから『毒見をお願いします』って頼まれるようになっちゃいました」

「えぇ……？」

これがモテモテ宦官の真実だったとは。

今度は楊鈴たちが、順子に生ぬるい視線を向ける番だった。

「あ、謝礼はちゃんといただいてますし、たまにお菓子ももらえたりするんですよ」

「ちなみに、具体的においくらほどで？」

「えーと……」

楊鈴に尋ねられて順子が答えた金額に、梅桃コンビは「安すぎる！」と大きく身を乗り出した。

「子供のお使いじゃないんだから！」

「命がかかってんだよ！」

「で、でも、今まで毒が入っていたこともないですし……」

厚化粧で凄まれて、順子がおどおどと目を泳がせる。

その頼りない姿を見つめ、楊鈴は深く溜め息をついた。

順子の無知につけ込んだ妃や侍女たちのあくどさは言うまでもないが、本人の危機感のなさにも大いに問題がある。

「これまで何事もなかったのは、運がよかっただけにすぎません。万が一、本当に毒が入っていてあなたが倒れたとしても、彼女たちはあなたを救おうとはしないでしょう。毒見を肩代わりさせていたことが露見してしまいますからね」

「それは……」

「毒見役というのは、それほど危険だからこそ高い給金が支払われるのです。彼女たちは自らの身を守りつつ、給金をもらうためにあなたを都合よく利用していたのですよ」

もしかしたら、薄々その自覚はあったのかもしれない。楊鈴に厳しく説教され、順子は言葉を失ってうつむいてしまった。

立ち読みサンプル
はここまで

居間を沈んだ空気が包み込む中、紅梅と黄桃は、主がいつの間にか姿を消していることに気づいた。

「あれ？　銀流様？」

「お手洗いにでも行ったのかな？」

首を傾げる一同の前へ、軽い足音を立てて銀流妃が戻ってきた。

「ただいまー。ちょっと、あんたにお願いしたいことがあるんだけど」

その脇には、見覚えのある小さな木樽が抱えられていた。それを順子の目の前にドスンと置く。

「これ、さっき言ってた葡萄酒作りに使ってた樽なんだけど、まだ底に残ってるからちょっと舐めてくんない？」

「マジですか⁉」

「何驚いてんの。いつもやってることと一緒でしょ」

「いや、でも、ほぼ毒だってわかっているものを口に入れるのは、正直キツいです！」

信じられないとばかりに、順子は銀流妃と樽を交互に見つめた。

「銀流様、さすがにそれは……」

主を諫めようとした楊鈴だったが、途中で言葉を止めた。自分たちが本当に毒を作